



巻頭言

日本乳幼児精神保健学会のいままでとこれから

2019年末からのコロナ感染拡大の波が何度も押し寄せています。そのような中、乳幼児親子を支える最前線で働いていらっしゃる、さまざまな職種の皆様の日々の活動に敬意を表し、心から応援しています。そしてお互いに支え合える仲間がいらっしやることを祈っています。

その渦中、2020年4月に日本乳幼児精神保健学会FOUR WINDSと世界乳幼児精神保健学会日本支部が統合しました。統合直後、コロナ禍でなかなかスムーズに動いていけなかった時期もありましたが、2021年12月には、郡山実行委員会のご尽力で内容の充実したオンラインでの全国大会を実施できました。また、月1回のwebinar講義も現在7回目を数え、会員の皆様からもご好評いただいているシリーズとなっています。各委員会の活動も活発になってきています。

そして12月に開催された2021年度の総会において、今年2022年には、さらに一般社団法人となることが承認されまし

た。今までも、現場を真ん中に、多職種のメンバーで進めてきた学会活動でしたが、一般社団法人になるということは、乳幼児親子・家族の支援とその支援者への支援に向けて、社会的にもしっかりと責任をもって活動をしていくこととなります。現在、支援者への研修機会を保障すること、自分たちが関わっている家族をイメージしながら受講できる研修をより充実させることを進めていこうと準備をしています。各地域での乳幼児精神保健の促進も実践へと軸足を動かそうとしています。乳幼児親子を支援する政策についての学びや企画も始動しました。また、世界各国の現場においても同様に活動している世界の支部とも、交流していこうと計画をしています。社会に向けて、現状や課題を踏まえた提言をしていくことも重要なことでしょう。会員の皆さんと共に、ひとつひとつ実現していきたいと思えます。そして、養育者がほっとでき、乳幼児が健やかに育つ、そんな社会にしていきたいです。

Dalrymple 規子

日本乳幼児精神保健学会 2020年度通常総会報告

- ◆開催日時 2021年12月12日(日) 12:30~13:20 ◆開催場所 web上での開催
- ◆会員総数/出席者 382名(出席数41名、委任状出席数110名、合計151名)
- 司会:川畑友二 議長:大場エミ 議事録署名人:成井香苗

■第1号議案 2020年度活動報告

Dalrymple規子副会長から新学会への移行と、2021年3月の総会でを行った中間報告を踏まえた2020年度活動について報告あり。

各委員会の委員長から2020年度の活動報告あり

■第2号議案 2020年度会計報告

2020年度の会計について事務局菊池信太郎から報告。監事小笠原めぐみから監査報告。2021年10月25日に決算書と帳表類を監査した結果、事務局移転に伴う多少の混乱はあったものの、適正なものであることを認める旨の報告あり。

■第3号議案 一般社団法人日本乳幼児精神保健学会設立について

会長渡辺久子から一般社団法人日本乳幼児精神保健学会設立に関する経緯について説明あり。WAIMH(世界乳幼児精神保健学会)からの要望や、世界の各支部が法人化している現状について説明。また、国内の同様の団体のほとんどが法人化して活動していること、任意団体であるために同日行われた学術集会で厚生労働省からの後援

を得られなかったため、活動の幅を広げるには法人化は急ぎ実現する必要があることの説明あり。今後の法人格取得に向けた手続きについても説明され、2022年4月の法人設立が提案され、議場一致をもって可決成立した。

■第4号議案 任意団体日本乳幼児精神保健学会の解散について

第3号議案に伴い、任意団体日本乳幼児精神保健学会は今年度をもって解散することについての説明あり。任意団体の解散年月日、任意団体に現在所属している学会員の資格の継続、任意団体の財産の移行について説明あり。議場一致をもって可決成立した。

以上をもって本総会の議案審議を全部終了した。

司会は議長、議事録署名人を解任した後、閉会を宣した。

議事終了後、2022年度全国学術集会について、大会長牧真吉より報告がなされた。2022年度学術集会を11月26日(土)・27日(日)に愛知県名古屋市で開催すること、会場設営や開催方式について検討中であることの説明がなされた。

2021JAIMH設立記念郡山大会報告

第1回全国学術集会設立記念郡山大会実行委員会
大会長 成井香苗



去る12月11日(土)・12日(日)の2日間、福島県郡山市にて新生JAIMH全国学術集会設立記念大会「震災後10年 紡ぐ子どもの未来」を開催しました。感染対策のためオンラインとなりましたが、約200名が参加しました。

まず市民公開講座では、日大工学部の岩城一郎教授からサステナブルな子どもの環境の創造を学び、小児科医菊池信太郎先生から震災後の子どもたちの心身の発達状況とその問題、絵本作家いせひでこ様からは母と子の命の響き合い、すなわち私たち学会の土壌となる学びを深めました。

開会式では、秋篠宮皇嗣妃殿下より賜ったお言葉が読み上げられました。品川 万里郡山市長からご挨拶、さらにWAIMH事務局長カイヤ・プーラ博士からはZoomでメッセージをいただきました。カイヤ先生は、WAIMH世界乳幼児精神保健学会の歩みを振り返るとともに、渡辺会長をはじめとする日本人の功績を紹介しました。加えて自国フィンランドの乳幼児精神保健のプログラムを紹介、その中の新たな試みは福島の支援から影響を受けたとも述べていらっしゃいました。私たちの学会がWAIMHとしっかり繋がり、私たちの実践が世界に届き相互に影響し合っていることを確認してうれしく思いました。

シンポジウム1では震災後に傷ついた愛着の問題を取り上げ、保育現場や児童養護施設での取り組みを発表してもらった後、社会的養護を受け育った当事者の声を聴きました。彼らの逞しさレジリエンスに感動し、愛着を守り促す支援の大切さを共有しました。

2日目は、会員のポスター発表の後、長谷川京子先生の離婚後の共同親権についてのレクチャーと招待講演がありました。BRAC大学エラム・マリム博士にロヒンギャ難民キャンプでの人道的遊び場支援HPLの実践をZoomで講演していただき、子どもの心のケアの対策はその文化に根差した土着の遊びとそれができる安全なあそび場の支援が大切であること、震災後の福島の支援でも同様であったことを意見交換しました。

シンポジウム2では、震災後の支援の展開を展望しました。震災直後より本会への支援を継続してくださるノンフィクション作家柳田邦男先生に「失われたふるさとからの再生」と題し、故郷喪失の親子をどう支えるかを論じていただきました。「いわき市民放射能測定室」事務局長鈴木薫様には放射能汚染の故郷に生きて子どもを守るお母さんたちの実践と自らの体験を語る力、富森崇氏には母子の愛着を育む「親子遊びと親ミーティング」のNPOの支援とコロナ禍への展開を話してもらいました。

このように本大会は、実践的でリアルな子どもの支援・精神保健を検討し学び合い、世界への繋がりを確認し発信する機会となりました。実は、昨年2月13日震度5強の余震が起き、本大会実行委員会のメンバーは東日本大震災のトラウマが揺り動かされ、一時的に本大会の開催準備が停滞する事態が起きました。そうした困難を乗り越え開催することができたのも、渡辺久子会長や学会本部・幹事の皆さんのサポートのお陰です。感謝しお礼申し上げます。



■ 「児童養護施設の現状 ～愛情への執着～」

児童養護施設 森の風学園 矢板千秋



「愛着障がい」が多くの人に知られるようになり、その原因が大人の不適切な関りによるものであることが知られてきました。私達は、子ども達が愛情に飢えているのだからと献身的に、やさしく、意思を尊重して支援します。しかし、どういふわけか、やればやるほど問題行動は大きくなり暴言や暴力、要求が強くなり、手をつけられなくなります。そして職員は疲労困憊し、やがて現場を離れていきます。

虐待されてきた子どもにとって「家庭」という安心安全な場所は「相手を支配」する場所です。子ども達は周りの大人がしてきたように「自分の言うことを聞け」と行動します。まず、この支配的なゲームに乗らないようにし、子どもが「今まで何を教えられてきたのか」「何に苦しんでいるのか」を

観察、分析することが必要です。時に厳しい現実を突きつけることも大切です。その度に子ども達は「大人はだめだ。何もわかっていない」と悪態をつきます。私達も苦しいです。しかしそれは、愛情ややさしさに執着しているだけで、本当の愛情ではないと教える必要があります。愛情への執着は、その根っことなる部分を見えにくくし、かえって人との関係を悪化させます。私達は、子どもの問題行動に目がいきがちですが、その「つまづき」の元は愛着です。そこが解決されなければ、前に進めないことを心にとめ、愛着の問題と向き合う必要があると思っています。

■ 僕たちが変えたい未来 ～当事者としての活動と発信～

映像作家・絵本作家 西坂來人

僕は小学校の5、6年生の頃のほんのわずかな期間を児童養護施設で暮らしました。もともと僕の家は父親の家庭内暴力に悩まされており、父から逃れて施設へやってきました。

施設に来て驚いたのは、僕のケースなんて軽い方だったと思い知らされた事でした。壮絶な虐待を受けて施設にやってきた子どもたちが何人かいたのです。

また、当時は施設を出た後のサポートが全くありませんでした。親を頼れないまま厳しい社会にたったひとりで放り出される。そんなお兄さんたちを見て、子どもながらに「社会への絶望」を感じました。

若者たちの現状を社会に生きる多くの人に興味・関心を持ってもらうきっかけになればという思いから、数年前僕は施設を巣立った若者を描いた短編映画「レイルロードスイッチ」を作りました。

短編映画を土台にして長編映画を企画する中で、若者たちへの取材も行いました。たくさんの若者と出会う中で、精力的に当事者活動を行う素敵な仲間と出会ったのです。

彼らの強い想いに共感し、YouTubeで発信活動しようとして結成されたのが僕を含めた3人組の当事者チーム「THREE FLAGS」です。



山本昌子さんは生後4か月から19歳まで主に児童養護施設で育ちました。現在はボランティア団体ACHAプロジェクトで代表を務め、経済的な理由で振袖が着られない若者に振袖姿の写真を撮影してプレゼントする活動をメインにしながら、居場所事業やコロナ禍で困窮する若者への支援を行なっています。持ち前の明るさで若者や支援者達を常に笑顔にしています。

ブローハン聡くんは小学5年生から高校卒業までを児童養護施設で育ちました。外国人ルーツによる国籍の問題(無国籍児)、幼少期に義父から受けた壮絶な虐待経験がありましたが、それを感じさせない明るさと優しさを持った青年です。現在は埼玉県の実業でもある居場所「クローバーハウス」の管理責任者として若者たちの相談や支援に携わっています。

「興味・関心のある人に届ける」という意味では、YouTubeで発信するメリットは大いにあると信じています。当事者へはすぐに使える支援情報を。支援者には社会課題の現状と課題を届けることを目的にしています。

私たちが変えたい未来はたくさんあります。「子どもたち一人ひとりに平等な機会が与えられ、大切にされること」「親を頼れない若者たちが自立できる道があること」「親が虐待をしない環境づくり」など、番組で扱ったテーマの数だけ解決したい課題があるのです。

まだまだ私たちの認知度は低いですが、興味・関心を持っている人に現状や課題を知ってもらおう事でたくさんの解決策が現れ、少しずつ社会が変わると信じています。

小さな輪を広げていき「社会全体で子どもを育てる。子育てにたくさんの人が関わる」そんな未来になって欲しいと願っています。

■「震災後10年の子ども達の変化と未来に向けての提言」

認定NPO法人いわき放射能市民測定室たちね事務局長 鈴木 薫

東日本大震災による福島第一原発事故の子どもたちへの影響は、この10年間で悪化の一途をたどっている。

震災・原発事故の直後は、拡散した放射性物質による被曝を心配した保護者が子どもの外遊びを制限したり、初期被曝の影響による小児甲状腺がんの発症を心配した。さらに、今、子どもたちが生きる未来が、今後、数百年続くといわれる原発事故の後始末のために搾取されている。

2019年に日本原子力学会は、原発事故の後始末が完全に終わるには300年かかると報告した。2020年、東電は、福島第一原発1～3号機に残る溶融核燃料(デブリ)の総量は推計880トンと発表している。これは、1979年に炉心溶融(メルトダウン)が起きた米国のスリーマイルアイランド(TMI)原発の6倍の重量である。

経産省では、このデブリを取り出し保管庫に納め、汚染水を海洋放出し、原発の周囲の汚染物質を片付けることを「廃炉産業」とよんでいる。

経産省は、今の技術で一度に取り出せるデブリの量は数グラムと説明している。しかし、高濃度のデブリには人は近づけず、頼みの綱のロボットもベータ線でエラーが起きて動かなくなるなど困難を極める状態の中、「数グラム

のデブリ」を取り出す作業は至難の業である。この延々と続く被曝を伴う危険な作業を、成長していく子どもたちに担わせるため、そこに向かって歩む「福島イノベーションコースト構想」を国はつくった。

原子力発電所が事故を起こすと、その地域の子どもたちは数世代後まで、その後始末に関わる構造をつくられてしまい、未来を選択する自由も奪われ、自分たちが知らない間に道を決められてしまう。きらびやかな広報の嵐の中で、親も気づかぬうちに進む道がつけられていく。

10年かけて大人たちがつくった社会は、こんなむごいものである。

人間は、いつまでこんなことを続けるのだろうか。

震災から10年、子どもたちの未来に向けて提言したいことは「子どもを戦場に差し出す世の中を、そろそろ改めようよ」ということである。



■ 難民支援 …土地と文化へのリスペクト…

松原 徹(編集部)

今大会の海外招聘講師はバングラデシュのBRAC大学エラム・マリウム先生でした。ロヒンギャ難民キャンプ子どもの遊び支援主催者です。

この講演に出会うまでロヒンギャについて深く知ることはありませんでした。ミャンマーのイスラム系民族とされるロヒンギャの難民問題の始まりは第二次世界大戦前後まで遡ります。彼らは国籍を奪われ、住む場所を失い、不法移民扱いされてきました。近年では2017年にも激しい暴力や性的暴行を受け、家族を殺されたり家屋を焼かれるなど残虐な迫害を受けています。身も心も傷つき、生きるために隣国のバングラデシュへ避難してきたロヒンギャの人々への支援の実践から、本来あるべき人道支援とは何かをエラム・マリウム先生は教えてくれました。難民であるロヒンギャの人々の自主性(底力)を引き出すには子どもたちが安心できる居場所「遊び場」を作ることが必須であること、そこには押しつけの支援ではなく、見守りという後方支援の姿勢が大切であること、彼らの文化を保障することが必要であった等の経験談が語られました。

エラム・マリウム先生の穏やかでありながらも力強い語り、フィルムの中の子どもも大人も民族伝承の歌や遊び

を楽しみ、ロヒンギャ民族を象徴する様な鮮やかな花柄の布を用いて自分たちの手で空間を飾り、大人も子どもも笑顔を取り戻してゆく姿に説得力を感じました。子どもたちは自分達の文化を大切にされることで育ちます。そして彼らの文化を知るためには生活や遊びについて見守りの中で観察することが必要です。講演の中で何度も土地と文化へのリスペクトが大切と語られました。人道支援の中には彼らの中で生き続ける文化の保障「自尊心の保障」が欠かせない、彼らの文化へのリスペクトは難民に対する支援だけでなく、私たちが日常関わる子どもたちや家族への支援にも繋がっていることに気付かされた素晴らしい講演でした。



● 周産期から始まる虐待予防 ●

北島博之



「甘えの子育て」においては、泣く子を抱きしめ受け入れる「暖かさ」と可愛いと思う愛着で子を受け入れることが子に伝わり子の側からの「甘え」になってゆきます。土居健郎は「子どもが自分

を受け容れてくれているということ感ずることで甘えが成立するのである。」¹⁾と述べていますが、自分を認めてくれる親を認めるという子の強い主張です。親の側に子を「暖かく認める」心の余裕がないと子は甘えてゆか(け)ないということです。

前の学会で私が報告し損ねた虐待予防につながる内容(下線部分)を書きます。2018年に行なった一般の母親が「甘えの子育て」をされたかどうかに関するアンケートで、母親たちが母/父に甘えた率は対照例でも66%/45%しかなく、「甘え」の親子関係の危うさが判明しています。特にハイリスクの方々では、精神疾患全体で53%/24%(診断が明らかな精神疾患12名中4名4/12(うつ病1/3・パニック障害1/2・双極性障害1/2・統合失調症1/2)が「甘え」の意味がわからないと回答)と特に父への甘えが少なく、さらにパートナーチェンジ・未婚・未受診で回答いただいた7名全員が要支援特定妊婦で、父母ともに甘えていませんでした。²⁾

この調査を行なった病院は、分娩する母の2割以上が、精神疾患・未受診あるいは飛び込みの若年初

産婦・パートナーチェンジ・未婚の方です。当院出生の社会的にハイリスク因子を持つ児の予後を調査した丸山らによる報告³⁾によると、虐待を受けて死亡した乳児4例の母の全例が要養育支援者として保健センターや児童相談所の支援を受け、3例は退院前に院内あるいは地域でのカンファレンスを受けていました。4名とも心肺停止(3例が自宅、1例は他院受診時に)で生後24日、3か月、3か月、4か月で発見されました。母のハイリスク因子は、精神疾患かつ未受診(2例)、未婚(2例)で1例は違法薬物既往あり、また家庭の持つハイリスク因子はドメスティックバイオレンス(3例)、4名以上の多子家庭(2例)、生活保護(2例)という養育困難な家庭でした。死亡症例の両親共が医療者や保健所からの支援を拒否していました。

上の症例から考察すると、虐待で子どもを死亡させるハイリスクの親は、妊娠中から支援を受けながらもその支援を拒否しています。アンケート調査では、要養育支援を要する母親からの回答率は20%以下であり、対照例や精神疾患(約40%)の半分しかありません。この心の背景は、他人(特に医療や保健関係者)を信頼していないことです。この隘路を克服するには、ハイリスクの親自身の自己肯定感を引き上げエンパワーメントすることしかありません。例挙げると森田ゆりさんがされているように虐待親の人権(自己肯定感)を回復することです。⁴⁾村上靖彦さん著の「母親を孤独から回復する 虐待のグループワーク実践に学ぶ」を会員の皆様方に、ぜひ読んでいただけることを祈って筆を置きます。

【参考文献】

- 1) 土居健郎. 続「甘えの構造」 第3章 甘えの心理 (1)甘えの起源 pp91-93.
- 2) 光田 信明. 特定妊婦って何? 女性心身医学 2016;20(3):289-93. 弘文堂
- 3) 丸山朋子、逸見尚子、野間治義、楠本義雄、田尻仁. 当センター出生の社会的ハイリスク新生児261例の実態と虐待との関連性. 日本周産期・新生児医学会雑誌2015;51:1039-45.
- 4) 村上靖彦. 母親の孤独から回復する 虐待のグループワーク実践に学ぶ 第2章 環境づくりと体のまとも回復のための空間 p38-64. 2017 講談社選書メチエ

◆ 第1回日本乳幼児精神保健学会 郡山大会を終えて ◆

実行委員会事務局長 菊池信太郎

第新生JAIMHの1つの目的は、DX(デジタルトランスフォーメーション)でした。つまり、デジタルの技術を活用して、学会運営や活動をより積極的に拡げることでした。その意を受け、私は学会事務局を2020年に引き受けました。いくつか団体運営用のシステムを探したところ、スマートコアシステムにたどり着きました。このシステムは、会員情報や学会費等のデジタル化だけでなく、ホームページの管理や学術集会、セミナーの開催管理もできるという、まさに当会にふさわしいシステムと判断し導入をしました。事務局移転と併せ、創立記念の第1回全国学術集会もこのシステムが最大限活用できると思い、開催の手を挙げました。

従来本学会の学術集会の目玉は、会員が集い交流するための機会でした。学術的な知見の共有だけでなく、懇親会などで親交を深める絶好の場でし

た。しかし、コロナ禍での学会開催の見通しは大変厳しく難しい判断を迫られました。現地開催に伴うリスクと、親交の場の損失とのバランスをいかに保つか。結局完全オンラインでの開催に決定しましたが、すでに開会まで半年を切っていました。

初めてのオンライン開催ということで、参加の申込み方法と参加費の徴収方法、発表者および発表の配信方法、参加者への周知、外国人講師の動画作成(翻訳)など、ゼロから始めましたが、結果としてはそれぞれDXを活用し開催出来たのではないかと思います。最大の効果は、学会運営費を抑えられたことです。しかし、会員の交流が全く出来なかったのは残念に尽きますが、コロナ後の新しい学会のあり方の1つの試金石になったのではないかと思います。関係者各位に、この場を借りて御礼申し上げます。

JAIMH日本乳幼児精神保健学会 第2回全国学術集会 名古屋大会 開催のお知らせ

会期 2022年11月26日(土)27日(日)

会場 名古屋大学野依記念交流会館(ハイブリッド開催)

第2回JAIMH全国学術集会を「コロナ禍から考える子ども育ち不安に寄り添う現場の工夫」をテーマとして名古屋市にて開催します。

コロナの流行が続いていますので、現地とオンラインのハイブリッドで開催する予定です。

まだ、細かい内容までは詰めてはありませんが、教育講演には遊びをテーマとして早川隆志さんに遊びに誘っていただきます。地元の人を集めてシンポジウムを周産期と保育園からその後の連携という2本で多くの人に話していただく予定をしています。皆さんこの日程を予定に入れておいていただきますようによろしく申し上げます。(名古屋大会大会長 牧 真吉)

日本乳幼児精神保健学会 事務局

〒963-8871 福島県郡山市本町 1-13-17 医療法人仁寿会 菊池医院内 日本乳幼児精神保健学会事務局

TEL 024-932-0154 FAX 024-932-0245

E-mail info@japan-aimh.com <https://www.japan-aimh.com/>

会費のお振込みは下記の口座をお願いします

- 1 ゆうちょ銀行振替口座 番号 00200-6-82510 2 ゆうちょ銀行通常貯金口座 記号 10940 番号 30141501
名義:日本乳幼児精神保健学会 名義:日本乳幼児精神保健学会